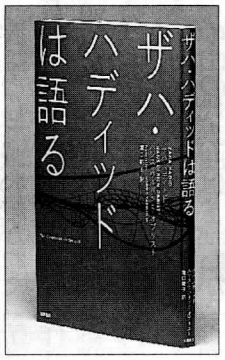
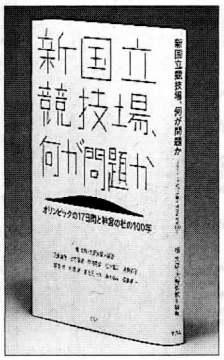
ニュースの本棚

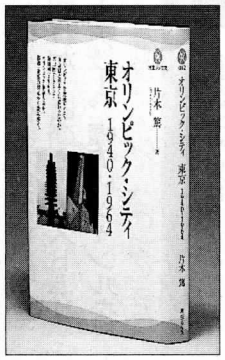
建築批評家・東北大学教授
五十嵐 太郎



ザハ・ハディッドほか著『ザハ・ハディッドは語る』（瀧口範子訳、筑摩書房・1944円）



槇文彦・大野秀敏編著『新国立競技場、何が問題か』（平凡社・1512円）



片木篤著『オリンピック・シティ 東京 1940・1964』（河出書房新社・1512円）

■新国立競技場

「白紙撤回」なお残る課題

様々な立場から意見が飛び交った新国立競技場の問題に関して、中立を装って自分こそは「正しい」と語ることは難しい。筆者はこれまで、世界各地の古代遺跡から現代建築まで膨大な数を見て歩き、建築家が創造した奇跡のような空間にしばしば遭遇した。その経験から、幾つかの本をとりあげよう。

そもそも、メディアが大騒ぎしたわりに、ザハとは何者か、が意外にちゃんと知られていない。いまだに「アンビルドの女王」という30年前の呼称が使われているからだ。『ザハ・ハディッドは語る』は、7回のインタビューを収録している。「ペット・ショップ・ボーイズ」のコンサートステージのデザインや展覧会の展示デザインといった仕事に加え、西欧諸国、アメリカ、中近東、アジアで実験的な建築プロジェクトに真摯に取り組み、実現させていることがわかるだろう。実際、彼女は徹底したプロ集団というべき数百人のスタッフを抱えた世界有数の設計事務所を率いている。なお、本書は図版が多くないので、昨年東京で開かれたザハ・ハディド展の公式ブック『ザハ・ハディド』（エーディーエー・エディタ・トーキョー・3024円）を参照されたい。

スタジアムが解体され更地になった国立競技場跡地＝7月、本社ヘリから

建築家の役割は

一連の騒動は、槇文彦の論文が発端となった。最初の問題提起や関連のシンポジウムを収録したのが、『新国立競技場、何が問題か』である。コンペの閉鎖性、巨大過ぎる施設、競技場以外の用途が不要に多いことなど、発注者側や都市計画の問題を正確に指摘し、建築家のあるべき役割を提示していた。理性的な批判である。だが、メディアは建築家やデザインこそが悪者という感情的な批判にすりかえ、金の問題で議論が沸騰し、衆院特別委での安保法案強行採決の直後、首相が白紙撤回を宣言した。その結果、仕切り直しの「国際」コンペは、ザハの再応募が不可能なほど閉じたシステムに変わり、指摘された問題があまり解決されないまま、建築家の役割だけは弱くなった。

今回の出来事は、槇グループの建築家による提言と市民運動が結びついたことが特筆される。後者の象徴である「神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会」の2年間の活動を描いたのが、今月出版された森まゆみ著『森のなかのスタジアム』（みすず書房・2592円）だ。連載をまとめただけに、時系列のドキュメントになっており、巻末の資料編も充実している。当初メディアは冷たかったらしいが、途中からテレビ局が「視聴率がとれますからね」と言うようになり、「私たちも驚いた白紙撤回」につながった。が、反対してきた彼女たちも、その後の展開に満足できない「白紙撤回」となったところに、問題の根深さがあるように思う。

五輪と都市構想

筆者は、ザハ案を修正しないなら、もはや2020年に無理に間に合わせることこそ無駄な支出を増やすから、建設を急ぐべきではないと考えている。あるいは「白紙撤回」ならば、『atプラス』の最新25号（太田出版・1404円）の特集「東京祝祭都市構想」で磯崎新が提言したように、皇居前広場で五輪のイベントを開催するくらいの大胆さが欲しい。

片木篤『オリンピック・シティ 東京 1940・1964』は、これまで五輪が建築と都市計画に影響を与えた歴史を掘り起こす。過去の営みが教えることは、いま起きていることは未来の東京の姿をつくるだろうということだ。

◇いがらし・たろう　67年生まれ。近著に『忘却しない建築』。